

マイクロカウンセリング研究

The Japanese Journal of Microcounseling

第3巻 第1号

2007年10月 Vol.3, No.1

巻頭言.....福原真知子 1

特別寄稿論文


「マイクロカウンセリングの歩みと展望」を読む
.....肥田野 直 3

原著論文

自己解決志向型発達カウンセリングアプローチの効果を探る
—未来型アプローチと現在型アプローチの比較—
.....山本真利子 5

原著論文

Translating and Adapting Psychological Tests for Cross-Cultural Uses
- Measuring Anxiety in the Japanese Culture -
.....福原真知子 15

 日本マイクロカウンセリング学会

The Japanese Association of Microcounseling (JAMC)

編 集 規 定

1. 本誌は日本マイクロカウンセリング学会の機関誌であって、原則として1年1巻とし1号と2号にわけて発行される。
2. 本誌は、原則として本学会員のマイクロカウンセリングに関する論文を掲載する。
3. 本誌には、原則として原著論文、資料論文、事例報告、展望、特別論文、及び学会ニュース、会報などの欄を設ける。
 - (1) 原著論文は、オリジナルな内容の研究論文とする。
 - (2) 資料論文は、追試の内容あるいは試験の内容の研究論文とする。
 - (3) 事例報告は、リサーチベースの姿勢を保った事例発表の形式とする。
 - (4) 展望は、内外の研究を広く収集整理し、総合的に概観した論文とする。
 - (5) 特別論文は編集委員会で、主としてマイクロカウンセリングまたはその関連領域の専門家に依頼する特別寄稿論文とする。
 - (6) 学会ニュースは、マイクロカウンセリング学に関する内外の情報及び、内外の関連学会の情報を掲載する。
 - (7) 会報は、本学会の会務報告に関するものである。
4. 3の(1)、(2)、(3)および(4)の論文は原則として投稿による。投稿された論文は査読を経て、編集委員会で掲載の可否が決定される。なお査読は編集委員以外の会員に依頼することがある。
5. 採択論文の掲載に要する費用は、原則として本学会で負担するが、図表等に関してはその費用の一部を執筆者に請求することがある。
6. 本誌に掲載した論文の執筆者に対して抜刷10部を贈呈する。これを超える部数については執筆者の負担とする。
7. 本誌に掲載した論文の原稿は、原則として返却しない。
8. 本誌に掲載された論文を無断で複製及び転載することを禁ずる。
9. 本誌に掲載された論文の著作権は本学会に帰属する。

執 筆 規 定

1. 論文の内容は、未刊行のものに限る。
2. 論文の採否は、査読を経て編集委員会により決定される。
3. 論文の長さは、原著論文については原則として8000～12000字相当(図表を含む)、資料論文、事例報告は2000～4000字相当とする。展望は2000字相当とする。特別論文は状況に応じて決定する。
4. 原著論文及び資料論文は原則として、問題(目的)、方法、結果、考察、(結論)、文献からなることが望ましい。
5. 原著論文、資料論文および事例報告には要約、キーワード(3語程度)および英文アブストラクトをつける。内容の長さは100～150語とし、英文については専門家の校閲を受けること。
6. 本文の記述は簡潔で明解にし、現代仮名遣い、常用漢字を使い、表、図は必要最小限にする。
7. 本文中の外国語(原文)の使用はできるだけさけ、外国語は外国人名、適切な訳語のない述語、書名やテスト名などに限る。
8. 数字は原則として算用数字を用いる。計量単位は国際単位を用いる。
9. 略語は一般的に用いられるものに限る。ただし、必要な場合は、初出の時にその旨を明記する。
10. 表と図は別紙に書き、通し番号を付し、表の題はその上部に、図と写真の題は下部に書く。これらは執筆者の責任で作成し、本文に挿入する場所を明記する。
11. 引用文献は、著者名のアルファベット順に一括して掲げる。その記述方法は日本心理学会発行の「執筆・投稿の手引き」(2000年版)を参照すること。
12. 脚注は通し番号をつけ、本文と同ページの下段に記し、本文中には、それに付する番号を付ける。
13. 論文は原則としてワープロ原稿で4部提出する。原稿の体裁はA4用紙に横書きで11ポイント文字、字数は1枚1000文字(40×25)、余白上下左右とも30mmとする。なお著者名・機関名・謝辞は別紙に記入すること。
14. 引用文献以外の詳細も原則として、日本心理学会発行の「執筆・投稿の手引き」を参照の上、執筆すること。
15. 投稿論文にはフロppyを添えることがのぞましい。

※本執筆規定は平成18年3月より有効

付記：本執筆規定は、日本マイクロカウンセリング学会会則に細則として掲載予定である。

巻頭言

今夏はことのほか異常な高温、地震、それに悪天候が続きました。そして私たちは自然と共存していることをつくづく実感させられました。皆様におかれましてはお障りありませんでしたでしょうか。

本組織が‘学会’に名称を変更してこのたび4冊目の会誌を発行するのはこびとなりました。学会では研究会・学会活動、出版活動など精力的にこなしております。

本号では「マイクロカウンセリングの歩みと展望」(川島書店)について肥田野直先生より特別寄稿論文をいただきました。当該の書は本研究会・学会二十周年行事の一環としてその活動を中心に振り返り、記録書として出版したものでいわば私どもの20年の集大成の一貫です。すでに会員諸氏のお手もとに届いていることと存じます。改めて会員諸氏のご支援への感謝の念と同時に学会の責務の重みを感じております。初心を貫きながらも、益々社会に貢献し得る学会に育てていきたいと思ひます。

そのほか本号には原著論文二編を掲載しております。学会の発展にともない今後とも論文投稿も活発になってくることを期待しております。論文はマイクロカウンセリングそのものに特化したもの(たとえば技法やトレーニングそのものについて)、あるいは日本のマイクロカウンセリングを工夫・創造する上で有用なアイデアや気づきを提唱するもの(たとえばサイコエデュケーション的研究、発達や文化との関連の研究など)があるかと思ひます。さしずめ前者は微視的視点から、後者は巨視的視点から、「マイクロカウンセリング」を探求するものであると考えます。挑戦をこころみていただければと思ひます。

以上ご挨拶とご報告まで。

寒い季節に向けてご自愛ください。

平成19年10月31日

日本マイクロカウンセリング学会会長 福原真知子

特別寄稿論文

「マイクロカウンセリングの歩みと展望」を読む

肥田野 直
(東京大学名誉教授)

本書は副題の「日本カウンセリング研究会／学会の活動を通して」が示す通り、同研究会が1985年に設立されて以来2005年に至るまでの20年間の活動の過程を丹念に記録した貴重な資料である。

本書の「あとがき」によれば、同研究会／学会の歴史は3つの時期に分けられる。すなわち、1985年～1997年の導入前・後期、1998年～2005年の啓発期、2005年以後の創造期の3期である。ちなみに、2005年は同研究会が学会に改組された年である。したがって1985年から2005年までの期間は同学会の前史とも言うべき時期に当たる。

本書は1998年以降開催された研究会と研修会の記録を収めたものであるから、研究会の啓発期における発展を辿るのに欠かせない文献資料ということができるであろう。

同研究会／学会は毎年2回の研究会と研修会を開催するスケジュールを守ってきた。それらの会合で録音されたテープの大部分を文字化したものが本書の主たる内容である。ただし、このほかに7回の会合の記録は既に小冊子としてそのつど刊行されているので、完全な歴史を知るにはそれらの小冊子を本書とあわせて読む必要がある。

これらの記録は講演や事例研究等の発表の記録ばかりでなく、ロールプレーでの発言や参加者の質疑応答まで詳細に再現されている。それによって研究会の素顔というべき活動状況を読み取ることができるのである。

本書の刊行を推進された福原真知子会長をはじめとする出版企画委員会の諸氏特に川島書店

の杉秀明氏のご尽力に深く感謝する次第である。

研修会ではマイクロカウンセリング・トレーニングの定石の通り導入・解説・ビデオテープの視聴あるいはロールプレーのデモンストレーション・小グループによる技法の研修・一般化(質議・討論を含む)の順序で学習が行われた。そのテーマは主として基本的かかわり技法と積極技法であったが、回を追うごとに参加者の理解と技量が向上する状況が記録からうかがわれるのである。

本書の中で、Ⅱ「ニューカウンセリングを学ぶーマイクロカウンセリングの新しいとらえ方ー」(1999)、Ⅲ「基本的かかわり技法を読む(1)」(1999)、Ⅳ「基本的かかわり技法を読む(2)」(1999)、Ⅶ「グループカウンセリングにおけるマイクロカウンセリング」(2000)、ⅩⅢ「マイクロカウンセリングの原点にかえて」(2003)がこれに該当すると思われる。また、本書に記載されていないが、既に小冊子として刊行されている報告書、すなわち、「カウンセリングの原点にかえて」(2002)もこのカテゴリーに分類できるであろう。なお、ローマ数字は本書の章を、()内のアラビア数字は開催年を示すものである。

次に、講演あるいは事例紹介に続いてロールプレーのデモンストレーションあるいはビデオテープの視聴が行われた後に質疑応答と討論が行われた例は、Ⅷ「積極技法を学ぶ(1)」(2001)、Ⅹ「コミュニティジェノグラムを中心に」(2002)の他、小冊子として刊行された報告書の「教育分野を中心としたマイクロカウンセリング一個人と組織の成長・発達を促すために」(2004)、

「マイクロカウンセリングの論理と実践—基本的傾聴技法の連鎖—」(2003)がある。

専門家による講演あるいは事例紹介に対する質疑応答に加えて参加者からの自由発表という形式のものもある。本書のⅠ「カウンセリングとアセスメント」(1998),Ⅴ「事例に学ぶ(Ⅰ)—医療臨床現場・福祉臨床現場から—」(2000),「事例に学ぶ(Ⅱ)—教育現場から—」(2000),その他,小冊子として刊行された報告書「マイクロカウンセリングの展開—さらなる理解と実行に向けて—」(1997)および「マイクロカウンセリングとサイコエデュケーション」(2000),「マイクロカウンセリング技法によるグループアプローチ」および「マイクロカウンセリング技法の適用—発達カウンセリング/心理療法の展開およびトラウマへのアプローチ—」(2001),「生涯を通してのウェルネス」(2005)は講演とシンポジウムの組み合わせである。

なお,会員による研究報告および事例研究としてはⅩ「マイクロカウンセリングに関する研究」(2002)とⅩⅡ「肢体不自由児の授業実践への取り組み」(2002)が掲載されている。

本書の紹介を終わるにあたって,Allen E. Ivey および夫人の Mary B. Ivey 両博士の研究会

／学会に対する貢献について触れたい。両博士は1984年以降5回来日しているが,特に1997年,2001年および2004年の来日はこれまで述べた会合との関係が深い。すなわち,1997年の公開セミナーでは「マイクロカウンセリングの基本と展開」と題する講演を行って,マイクロカウンセリング技法の三角形の階層表を詳細に解説し,メタモデルとしてのマイクロカウンセリングの意義を述べて,聴衆に多大の感銘を与えた。

2001年の東京および京都での講演は,グループアプローチへのマイクロカウンセリングの適用と発達カウンセリング/心理療法(DCT)が2つの大きなテーマであった。そこで我々は常に発展してやまないマイクロカウンセリングの新しい展開を実感することができた。この講演に刺激されてその後の研究会の活動が一層活発になったことは疑う余地がない。

さらに2004年の来日の機会に行われた「生涯を通してのウェルネス」の講演は機関紙「マイクロカウンセリング研究」第1巻第1号に掲載され,この講演を敷衍した論文は第1巻第2号に掲載されている。これら2論文は学会機関紙の門出を祝うIvey博士の贈物として長く我々の記憶にとどまることであろう。

原著論文

自己解決志向型発達カウンセリングアプローチの効果を探る
—未来型アプローチと現在型アプローチの比較—

山本眞利子

久留米大学

The Effect of a Future Oriented Self-Solution Developmental Counseling Approach: A comparison of the Future Oriented Approach with the Present Oriented Approach.

Mariko Yamamoto (*Kurume University*)

A Self-Solution Oriented Developmental Counseling approach which consisted of series of questions derived from the developmental therapy by Ivey (1991) and the solution-focused therapy by Berg (1994) and De Jong & Berg (1999) was developed by Yamamoto (2003, 2004) in an analogue experimental situation. This approach was a future-oriented one and presumed to facilitate the client reactions of sensorimotor level, concrete level, and formal level in a future problem-solving situation. This approach was compared with a present oriented solution-focused approach in an experimental situation. The results indicated that the future oriented approach facilitated more the hypothesized clients problem-solving reactions and decreased their anxiety reactions than the present oriented approach.

Key words: developmental approach, future-oriented self-solution, present-oriented self-solution

問題

Ivey (1985) がマイクロカウンセリングを提唱し、面接で行われるカウンセリング技法を一つずつ整理、分類したことで初心者を対象にしたカウンセリング技法の学習や教育が可能になった。これらのマイクロカウンセリングに関する研究はすでに詳しくまとめられている(玉瀬・田中, 1988; 福原・アイビィ・アイビィ, 2004)。玉瀬 (1990) は、大学生を対象に感情の反映技法の習得を試み、大学生でもマニュアルを読みモデルを観察することで感情の反映技法を行えるようになることを示した。また、山本(2007b)では解釈技法に関する基礎的研究を行い、玉瀬他 (1991) は「はい」や「いいえ」で答えられる閉ざされた質問と「はい」や「いいえ」で答

えられない開かれた質問の比較を行った。この研究では、開かれた質問の方が閉ざされた質問よりも話し手の応答時間が長く応答数が多いことが示された。これは、開かれた質問によって話し手から多くの情報を引き出すことができることを示唆している。このように、質問技法は有効なカウンセリング技法の一つである。

さて、Ivey (1991) は発達心理療法も提唱している。発達心理療法では、カウンセリングにおいてもクライエントの認知が発達すると考え、開かれた質問技法を工夫して、クライエントの各認知的発達水準へのアプローチを試みている。例えば、感覚運動的水準へのアプローチでは、「何を見ましたか。何を聞きましたか」と質問しクライエントが感情や感覚に焦点を当てるよう

促す。具体操作的水準へのアプローチでは、「具体的には何が起ったのですか。あなたは何と言ったのですか。相手の人は何と言ったのですか」と質問し、クライアントが具体的な出来事について述べるよう促す。形式操作的水準へのアプローチでは、「あなたは、そのような行動や思考を繰り返すパターンがあるようですが、このパターンについてどう感じ、考えますか」と質問しクライアントが自分の思考や行動について考えられるよう促す。確かに、これらの質問技法を用いることで、クライアントの認知的発達水準の移行がみられる（光武・玉瀬, 1995; 玉瀬, 1998）。しかし、これらは現在もしくは過去に焦点を当てているもので未来を扱っているわけではない。

近年, Berg (1994) や De Jong & Berg (1999) は, ブリーフ・セラピーを提唱し, 未来の解決状況に焦点を当てることでセラピーが効果的に進むことを示唆している。これらを踏まえ, 山本 (2003) は未来の解決状況におけるクライアントの感覚運動的水準, 具体操作的水準, 形式操作的水準を促す自己解決志向型発達カウンセリングアプローチを開発した。山本 (2004) は, このアプローチを実際に友人関係で悩んでいた大学生に適用した。その結果, 大学を辞めようとしていた学生は, 高校生まで続けていたオーボエの演奏があったことに気づき自分ひとりで吹奏学部に入部した。そうしたところ, 先輩から歓迎され居場所を見つけ, 少しずつ自分らしい生活を創造しはじめ, 結果的に友人関係の障害を乗り越えた。つまり, 学生はこのアプローチによって自分の内にあったオーボエというリソースを発見し, それを活用することで解決を創造したのである。

しかし, 山本 (2004) の報告は一事例にすぎない。未来の解決状況における感覚運動的水準, 具体操作的水準, 形式操作的水準を促すアプローチがより一般的にどのような効果をもたらすかについて実証的には調べていない。そこで, 本研究では, 解決状況におけるクライアントの認知的発達水準を促す自己解決志向型発達カウ

ンセリングアプローチ（ここでは未来型と称する）がクライアントに及ぼす影響について検証する。これまで, 山本 (1998a, 1998b, 2002a, 2002b, 2007b) では, カウンセリングにおけるクライアントの認知反応や認知的発達水準について調べているがクライエト反応については調べていない。未来の解決状況に焦点を当てるミラクル・クエスチョンで解決が効果的に進むことから (Berg, 1994; De Jong & Berg, 1999; 原田, 2002), 未来の解決状況におけるクライアントの認知的発達水準を促す未来型アプローチでも, クライエントの解決を促すと考えられる。本研究ではこの点について検証する。

また, 従来の研究では, 現在の状況に焦点を当てるアプローチと未来の解決状況に焦点を当てるアプローチの比較を行った研究はほとんどない。本研究では, 現状におけるクライアントの認知的発達水準を促すアプローチ（現在型と称する）と未来型アプローチがクライアント反応, 特にクライアントの問題解決反応に及ぼす影響について比較する。現在に焦点を当てる現在型アプローチでは, クライエントは現在の問題状況に視点を向けることとなり, 未来型アプローチでは, クライエントは解決状況に視点を向けることになる。そのため, 未来型アプローチの方が現在型アプローチよりもクライアントの解決を促すと考えられる。

なお, 従来からカウンセラーの純粋性や共感性などの印象が調べられている (玉瀬, 1998)。これは, カウンセリング技法と態度は切り離すことができず, どのようなカウンセリング技法であっても, 技法の効果が発揮されるためには, それを行うカウンセラーの態度が影響するからである。そこで, 本研究では未来型アプローチと現在型アプローチがクライアント反応に及ぼす影響の他, カウンセラーの態度を示すカウンセラー評定に及ぼす影響についても検証する。

目的

未来の解決状況における感覚運動的水準, 具体操作的水準, 形式操作的水準の反応を促す未

来型アプローチと、現在の状況における感覚運動的水準、具体操作的水準、形式操作的水準の反応を促す現在型アプローチが、カウンセラー評定及びクライアント反応評定に及ぼす影響を比較する。

方法

時期：2006年7月～9月

参加者：大学生138名。

材料：(1) アプローチ

未来型アプローチは、山本（2003, 2004）で開発された自己解決志向型発達カウンセリングアプローチだった。このアプローチは未来の解決状況に焦点を当て、解決状況におけるクライアントの感覚運動的水準、具体操作的水準、形式操作的水準の反応を促す一連の質問からなっていた。ここでは未来型アプローチと称する。現在型アプローチは、Ivey（1991）を参考に、現在に焦点を当て現在の状況におけるクライアントの感覚運動的水準、具体操作的水準、形式操作的水準の反応を促す一連の質問からなっていた。ここでは現在型アプローチと称する。未来型アプローチと現在型アプローチの違いは、未来型アプローチでは、「あなたの就職・進学がうまくいったことをイメージして下さい」が、現在型アプローチでは、「あなたの就職・進学状況をイメージして下さい」が明示されていたがその他は全く同じだった（資料参照）。

(2) カウンセリング台本

未来型と現在型の2つのカウンセリング台本を作成した。未来型の台本は、未来型アプローチを実際に就職活動で悩んでいる4年生の女子学生に行い、未来型アプローチとこのアプローチに対する学生の応答内容からなっていた。現在型の台本は、現在型アプローチを同じ学生に行い、現在型アプローチとこのアプローチに対する学生の応答内容からなっていた（資料参照）。

(3) カウンセラー評定項目

カウンセラー評定項目は、玉瀬（1998）を参考にした、好ましいと考えられるカウンセラーの態度に関する12項目からなっていた（表1）。

表1 カウンセラー評定項目

共感性

- ①クライアントと一緒に考えてようとしている
- ②クライアントの話の内容を理解しようとしている
- ③クライアントの感情を理解しようとしている
- ④クライアントのおかれた状態に合わせて話をすすめようとしている

純粋性

- ①クライアントに対して自然な態度で接している
- ②ありのままの自分を出している
- ③自分がカウンセラーであることを誇示していない
- ④作為的でない

尊重性

- ①クライアントを人間と認め尊重している
- ②クライアントの役に立とうとしている
- ③あたたかく思いやりをもって接している
- ④価値判断をせずクライアントを受容している

(4) クライアント反応評定項目

クライアント反応評定項目は、面接が効果的に進みクライアントの認知的発達水準が下位から上位へと移行することが検証された面接内容（山本, 2007b）を2名の学生にロールプレイで演じてもらい、演じた後に学生2名と筆者を含む計3名でクライアントに生じるであろう反応を話し合い作成した。項目は将来に対する不安に関する4項目、問題解決に関する5項目だった（表2）。

表2 クライアント反応評定項目

将来に対する不安

- ①将来のことで葛藤している
- ②将来に対する焦りがある
- ③将来に対して不安がある
- ④将来について心配している

問題解決

- ①問題を解決しようと思う
- ②解決にむけて取り組みそう
- ③問題が解決できそう
- ④解決に向けて、今一番重要なことがなにか分かってきた
- ⑤問題解決にむけて工夫できそう

手続き

手続きは、ロールプレイを用いた集団実験で約60分間だった。参加者138名は、2人1組になり、カウンセラー役かクライアント役になった。そして、彼／彼女らは現在型の台本と未来型の台本を演じた。カウンセラー役は予め設定されたアプローチの箇所を読み、クライアント役はアプローチに対するクライアントの応答箇所を読んだ。読み演じた後にカウンセラー役の参加者は、自分がこのカウンセラーだとしたらどのように思うかでカウンセラー評定項目に、“全くそう思わない1点”、“あまりそう思わない2点”、“どちらでもない3点”、“ややそう思う4点”、“とてもそう思う5点”の5段階で評定した。クライアント役の参加者は、自分がこのクライアントだとしたらどのように思うかでクライアント反応評定項目に5段階で評定した。1回目のロールプレイが終わり2回目を先と同じように演じ評定した。参加者のうち半数は未来型から現在型の順番、残りの半数は現在型から未来型の順番でそれぞれの役を演じ評定した。

結果

1 カウンセラー評定

カウンセラー評定項目は5段階からなり、カウンセラー役69名のうち記入漏れを除く計68名の現在型と未来型の評定得点について t 検定を行った。カウンセラーの共感性に関する項目「クライアントと一緒に考えてようとしている」得点($t(67) = -4.01, p < .01$)、「クライアントの話の内容を理解しようとしている」得点($t(67) = -3.63, p < .01$)、「クライアントの感情を理解しようとしている」得点($t(67) = -3.25, p < .01$)で、現在型より未来型が1%で有意に高かった。「クライアントのおかれた状態に合わせて話をすすめてようとしている」得点($t(67) = -2.60, p < .01$)については、現在型と未来型で差が示されなかった。カウンセラーの純粋性に関する項目の「クライアントに対して自然な態度で接している」得点($t(67)$

$= -3.39, p < .01$)、「ありのままの自分を出している」得点($t(67) = -3.27, p < .01$)、「自分がカウンセラーであることを誇示していない」得点($t(67) = -4.19, p < .01$)について現在型より未来型の方が1%水準で有意に高かった。「作為的でない」得点($t(67) = -0.73, p < .01$)については、現在型と未来型で差が示されなかった。尊重性に関する項目の「クライアントを人間として認め尊重している」得点($t(67) = -5.71, p < .01$)、「クライアントの役に立とうとしている」得点($t(67) = -5.19, p < .01$)、「あたたかく、思いやりをもって接している」得点($t(67) = -6.05, p < .01$)、「価値判断をせずクライアントを受容している」得点($t(67) = -3.55, p < .01$)について現在型より未来型の方が1%水準で有意に高かった。

これらの結果から、おおむね現在型よりも未来型の方が、カウンセラーとして好ましい態度でクライアントに接していると思うと評定されたことが示されている。

2 クライアント反応評定

クライアント反応評定項目は、5段階からなり、クライアント役69名のうち記入漏れを除く計66名のクライアント反応評定で得られた未来型と現在型のデータについて t 検定を行った。「将来のことで葛藤している」得点($t(65) = 13.01, p < .01$)、「将来に対する焦りがある」得点($t(65) = 14.65, p < .01$)、「将来に対して不安がある」得点($t(65) = 10.68, p < .01$)、「将来について心配している」得点($t(65) = 10.23, p < .01$)で、未来型より現在型の方が1%水準で有意に高かった。問題解決に関する評定項目の「問題を解決しようと思う」得点について($t(65) = -1.26, p < .01$)で未来型と現実型で差が示されなかった。しかし、「解決にむけて取り組みそう」得点($t(65) = -5.51, p < .01$)、「問題が解決できそう」得点($t(65) = -7.09, p < .01$)、「解決にむけて今、一番重要なことがなにか分かってきた」得点($t(65) = -4.26, p < .01$)、「問題解決にむけて工夫で

表3 カウンセラー評定得点の平均値と標準偏差

項目	現在型		未来型		有意水準
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
共感性 クライアントと一緒に考えている。	2.72	0.82	3.18	0.65	**
クライアントの話の内容を理解しようとしている。	2.99	1.01	3.51	0.89	**
クライアントの感情を理解しようとしている。	3.01	1.04	3.54	0.92	**
クライアントのおかれた状態に合わせて話を進めようとしている。	2.90	1.13	3.29	0.83	ns
純粋性 クライアントに対して自然な態度で接している。	3.06	0.79	3.44	0.78	**
ありのままの自分を出している。	2.32	0.94	2.76	0.93	**
自分がカウンセラーであることを誇示していない。	3.15	0.93	3.63	0.81	**
作為的でない。	2.69	0.97	2.79	0.97	**
尊重性 クライアントを人間として認め、尊重している。	3.06	0.96	3.72	0.71	**
クライアントの役に立とうとしている。	2.94	0.98	3.66	0.78	**
あたたかく、思いやりをもって接している。	2.69	1.03	3.60	0.87	**
価値判断をせず、クライアントを受容している。	3.15	0.80	3.63	0.94	**

** $p < .01$

表4 クライアント反応評定得点の平均値と標準偏差

項目	現在型		未来型		有意水準
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
将来に対する不安 将来のことで葛藤している	4.36	0.76	2.55	0.93	**
将来に対する焦りがある	4.56	0.73	2.41	0.99	**
将来に対して不安がある	4.41	0.82	2.65	1.09	**
将来について心配している	4.27	0.94	2.58	1.01	**
問題解決 問題を解決しようと思う	3.68	0.95	3.89	0.98	ns
解決にむけて取り組みそう	3.02	0.85	3.89	0.83	**
問題が解決できそう	2.70	0.96	3.79	0.75	**
解決にむけて今、一番重要なことがなにか分かってきた	2.83	1.18	3.64	0.92	**
問題解決にむけて工夫せきそう	2.77	1.09	3.91	0.84	**

** $p < .01$

きそうだ」得点 ($t(65) = -7.17, p < .01$) で現在型より未来型の方が 1 % 水準で有意に高かった。

これらの結果は、クライアントの将来に対する不安に関する評定項目の得点が未来型よりも現在型で有意に高く、逆に問題解決に関する評定得点が現在型よりも未来型で有意に高いことを示している。

結果と考察

本研究の結果から、現在型より未来型で、クライアントの「将来に対する不安」に関する評定得点が低かった。これは、現状に焦点を向けることよりも未来の解決状況に焦点を向ける方が、クライアントはあまり不安を感じないと思うと評定されたことを示している。詳細に未来型アプローチと現在型アプローチによるクライアントの応答を見ると、現在型ではクライアントは自分を「追い込んで」いることがわる。例えば、「もっと頑張れ～！！説明会に参加しろ～！！試験うける～！！と、声をかけます」と自分に言いかせている。つまり、現在型アプローチでは、現状がきつければきついほど、クライアントは現在の問題状況を見て焦り、自分を追い詰めて不安になったと考えられる。

「問題解決」に関する評定得点について、現在型よりも未来型で高かった。これは、未来の解決状況に焦点を当てる未来型アプローチで、クライアントは問題が解決できそうだと思い、解決に向けて取り組もうと思うことを示唆している。クライアントの応答内容を見ると、未来型では、「もっと力を抜いて、リラックスして頑張れ～！！ボチボチでいいよ～。マイペースでいこう！！ファイト！！と、声をかけます」や、「少し余裕があります」と応えている。つまり、クライアントは、未来の解決状況に焦点を向け解決状況を具体的に明確にイメージすることで、あまり自分を追い詰めることなく解決へと促されたと考えられる。

以上、本研究では未来の解決状況におけるクライアントの認知的水準を感覚運動的水準、具

体操作的水準、形式操作的水準へと促す未来型アプローチの特性について調べた。その結果、この未来型アプローチで、クライアントの問題解決を促すことが示された。これは、Berg (1994), De Jong & Berg (1999) らの未来に焦点を当てるミラクル・クエスチョンと類似の効果を有すると考えられる。では、本研究で扱った未来型アプローチ（自己解決志向型発達カウンセリングアプローチ）と Berg (1994), De Jong & Berg (1999) が用いている未来の解決状況に焦点を当てるミラクル・クエスチョンの違いは何なのか。

本研究で扱った自己解決志向型発達カウンセリングアプローチは、解決状況におけるクライアントの認知水準を下位水準から上位水準にかけて段階的に順序よく移行させる。一方、ミラクル・クエスチョンは、「奇跡が起こって、あなたの問題が解決してしまったら」と質問することで、クライアントの解決状況におけるイメージを引き出すに留まる。実際のブリーフセラピーでは、ミラクル・クエスチョンの後に続いて解決イメージに基づいたアプローチが必要になる。この点、自己解決志向型発達カウンセリングアプローチでは、まず、クライアントに解決状況をイメージさせ、その上で、具体操作的水準に焦点を向けさせことで、解決状況における具体的な出来事を明確化させる。そして、形式操作的水準に焦点を向けさせることで、クライアントに解決状況における自分や自分の行動、周囲との関係のみならず解決を創造するために必要なリソースについての気づきを促す。このようにして解決状況における一連の質問を用いて構造化を行っている。山本 (2004) では、このアプローチを友人関係で悩んでいたクライアントに適用することで、クライアントは吹奏というリソースを見出し、実際に吹奏を生活に取り入れて友人関係の障害を乗り越え、解決を創造した。

このように、自己解決志向型発達カウンセリングアプローチは、解決状況におけるクライアントの認知的水準を構造的に下位から上位へと

促すことで、クライアントが自分の内にあるリソースに気づき、それを実際の生活に取り入れ易いように工夫されている。よって、両アプローチはいずれもクライアントの解決を促すものの、ミラクル・クエスチョンだけを行うよりは、解決状況に焦点を当てた一連の質問によって自己解決志向型アプローチを行うほうがクライアントの解決が促され易いと考えられる。ただし、本研究では両者の比較は行っておらず、今後さらに検証する必要がある。

カウンセラーの「共感性」、「純粋性」、「尊重性」に関する得点については、いずれも現在型よりも未来型の方が高かった。当初はカウンセラーが、クライアントのきつい現状や状態について尋ねることなく、いきなり未来の解決状況について質問する未来型のアプローチを行うことで、カウンセラー評定得点は低くなると考え

ていた。しかし、カウンセラーが、突然、クライアントの未来の解決状況について質問する未来型のアプローチを行った際、カウンセラー役の参加者は、カウンセラーがクライアントのことを理解し、共感し、ありのままの自然体であると評定した。

これらのことから、解決状況に焦点を当ててクライアントの認知水準を下位から上位へと促すことで、クライアントはあまり不安を感じることなく解決に向かうが、この時カウンセラーには共感的で純粋なクライアントを尊重する態度が貫かれていることが想定される。だが、本研究で得られた結果は、実験条件上でのもので、この結果を即、臨床場面に適用することは難しい。今後は、未来型アプローチを適用した場合と現在型アプローチを適用した場合の事例について、詳細に検討する必要もある。

〔引用文献〕

Berg, I. K. (1994) *Family Based Services*. New York : Norton (磯貝希久子監訳1997家族支援ハンドブック 金剛出版)。

De Jong, P., & Berg, I.K. (1998) *Interviewing for Solutions*. Pacific Grove : Book/Cole (玉真慎子・住谷祐子 監訳1999 解決のための面接技法 金剛出版)。

原田由美子 (2002) 大学生の将来目標を対象とした解決アプローチによる認知変容に関する実験的研究 ブリーフサイコセラピー 11, 68-76。

福原真知子・アイビィ, A. E.・アイビィ, M. B. (2004). マイクロカウンセリングの理論と実践 風間書房。

アイビィ A. E. (1985). マイクロカウンセリング “学ぶー使うー教える” 技法の統合：その理論と実際 福原真知子・楢山喜代子・國分久子・楢木満生 (訳編) 川島書店。

Ivey, A. E. (1986). *Developmental Therapy*. San Francisco : Jossey-Bass. (福原真知子・仁科弥生 (共訳) (1991). 発達心理療法—実践と一体化したカウンセリング理論 丸善)。

光武健介・玉瀬耕治 (1995) 発達カウンセリング・療法理論における認知的発達の査定と介入 カウンセリング研究, 28, 143-153。

玉瀬耕治 (1990) 基礎的なカウンセリング技法の習得に及ぼすマニュアルとモデリングの 効果 カウンセリング研究, 23, 1-8。

玉瀬耕治 (1998). カウンセリング技法入門 教育出版。

玉瀬耕治・田中寛二 (1988). マイクロカウンセリングに関する研究 奈良教育大学教育研究所紀要, 24, 53-66。

玉瀬耕治・鳥巢佳子・井川純 (1991). 実験的面接での応答の長さに及ぼす質問の流れの効果 奈良教育大学紀要, 40, 199-209。

山本真利子 (1998a) 解釈の内的で肯定的な原因帰属がカウンセラーと来談者の認知的反応評定に及ぼす影響 吉備国際大学社会福祉学部 研究紀要, 3, 123-131。

山本真利子 (1998b) カウンセラーの原因帰属スタイルがカウンセラーと来談者の認知的反応評定に及ぼす影響 カウンセリング研究, 31, 237-246。

山本真利子 (2002a) 発達心理療法的観点による学生の認知的反応と援助行動の可能性 カウンセリング研究 35, 139-144。

山本真利子 (2002b) 発達心理療法的観点によるエンカウンター・グループの発展過程 学生相

談研究 23, 156-165.

山本眞利子 (2003) 授業における自己解決志向型発達カウンセリングアプローチの試み 学生相談研究, 24, 52-65.

山本眞利子 (2004) 対人関係で悩む学生への自己解決志向型発達カウンセリングアプローチの試み プリーフサイコセラピー研究, 13, 19-28.

山本眞利子 (2007a) マイクロカウンセリング

における解釈技法の有効性に関する実験的研究
広島大学大学院博士学位論文.

山本眞利子 (2007b) 発達心理療法に基づくカウンセリング過程におけるマイクロカウンセリング技法意図－クライアントの認知発達の水準とカウンセリングの効果－久留米大学心理学研究 6, 63-73.

謝辞: 本研究を行うにあたり手塚恵美さん, 橋口真人君, 近藤素子さん, 田中明日美さんのご協力を頂きました。また, 平成18年度久留米大学文学部山本ゼミ卒業生らの協力を頂きました。なお, 帝塚山大学教授玉瀬耕治先生らの資

料を参考にさせて頂きました。ここに改めまして心からのお礼を申し上げます。

—2007.9.15 受稿, 2007.10.12 受理—

資 料

カウンセラー台本（未来型）

〈感覚運動的水準〉

（１）カウンセラー

「あなたの就職・進学状況がうまくいったことをイメージして下さい。どのような感じがしますか。」

（１）クライアント

「うれしい気持ちと、明るい感じがします。初給料が楽しみです。」

（２）カウンセラー

「あなたの就職・進学状況がうまくいったことをイメージして下さい。あなたの頭、肩、胸、腕、足はどのような感じがしますか。」

（２）クライアント

「身体は軽いです。スッキリしていて、期待感を抱いています。少し余裕があります。」

〈具体操作的水準〉

（３）カウンセラー

「あなたの就職・進学状況がうまくいったことをイメージして下さい。あなたや、あなたのまわりではどのようなことが起こっていますか。」

（３）クライアント

「遊びに行く計画など、次の目標をたてています。楽しみにしています。」

〈形式操作的水準〉

（４）カウンセラー

「あなたの就職・進学状況がうまくいったことをイメージして下さい。そのような状況なのは、あなたの中に、どのような考え方や捉え方があったからでしょうか。」

（４）クライアント

「プラス思考な部分と、努力と根性、持久力があったからだと思います。それに、私がうまい具合に評価されたからだと思います。」

（５）カウンセラー

「就職・進学状況がうまくいったことをイメージして下さい。就職・進学がうまくいったあなたは、今の自分にどんな言葉をかけるでしょうか。」

（５）クライアント

「もっと力を抜いて、リラックスして頑張れ～！！ボチボチでいいよ～。マイペースでいこう！！ファイト！！と声をかけます。」

（６）カウンセラー

「就職・進学状況がうまくいったことをイメージして下さい。就職・進学がうまくいったあなたは、今の時運にどんなことができるとアドバイスしますか。」

（６）クライアント

「コツコツと努力して、へこみ続けないでプラス思考になろう！周りをきにしないようにね。もう少し、面接の際にうまく対応できるように練習しておこう！とアドバイスします。」

カウンセラー台本（現在型）

〈感覚運動的水準〉

（１）カウンセラー

「あなたの就職・進学状況をイメージして下さい。どのような感じがしますか。」

（１）クライアント

「緊張と苦しい感じがします。今の状況が重荷で逃げ出したい気持ちがあります。早くこの状況から解放されたいと思います。不安です。」

（２）カウンセラー

「あなたの就職・進学状況をイメージして下さい。あなたの頭、肩、胸、腕、足はどのような感じがしますか。」

（２）クライアント

「身体は重く、モヤモヤした感じがします。常に何かを考えなくてはいけない感じがして、筋肉の痛みを感じます。足が重く、痛いです。革靴を見るのも嫌な感じで、履くとダルくなります。」

〈具体操作的水準〉

（３）カウンセラー

「あなたの就職・進学状況をイメージして下さい。あなたやあなたのまわりではどのようなことが起こっていますか。」

（３）クライアント

「ビリビリした感じで、必死になっていますね。最近友達とあまり交流の機会がありません。誰かに見張られている感じがするんです。」

〈形式操作的水準〉

（４）カウンセラー

「あなたの就職・進学状況をイメージして下さい。そのような状況なのは、あなたの中に、どのような考えや捉え方があったからでしょうか。」

（４）クライアント

「はやく決めなくてはいけない、負けられない、就職先をきめなくちゃいけないという考えや、自分を縛り付ける考え方があったからだと思います。」

（５）カウンセラー

「あなたの就職・進学状況をイメージして下さい。今の自分にどんな言葉をかけるでしょうか。」

（５）クライアント

「もっと頑張れ～！！説明会に参加しろ～！！と、声をかけます。」

（６）カウンセラー

「あなたの就職・進学状況をイメージして下さい。今の自分にどんなことができるとアドバイスしますか。」

（６）クライアント

「ひたすら勉強することじゃないかな。ただ、数学や国語の問題を解くだけではなくて、面接の練習やいろんな知識を身につけることが大切になってくると思うよ。あと、もう少し余裕のある考え方をするのもいいと思う。やっぱり、自分を追い詰めるだけでは、いい結果に結びつかないと思うからね。とアドバイスします。」

Translating and Adapting Psychological Tests for Cross-Cultural Uses - Measuring Anxiety in the Japanese Culture -

Machiko Fukuhara, Ph.D. (*Tokiwa University*)

Tadashi Hidano, Ph.D. (*University of Tokyo*)

This is to discuss issues of adaptation of the STAI Form-Y to Japan from the viewpoint of translation and culture. With careful selection of the translated items, in regard to the connotation of the words, STAI-YJZ (Japanese version of STAI Form-Y) was constructed using a total of 2253 (male1088: female1165) Japanese students, and the validity of the instrument was tested. During the process of construction of the Inventory, it was found that the way of expressing anxiety might be different between the Japanese students and their American counterparts: The Japanese tended to express 'positive feelings' hesitantly compared with the Americans. In an experiment carried later, with a total of 985 in the occupational group (male 141: female 844) was this tendency. also, supported. This might suggest the researcher be aware of the similarities and differences of expressed and/or suppressed emotion and behavior among individuals having different cultural background.

Key words: STAI Form-Y, adaptation, culture

Problem

State Trait Anxiety Inventory (STAI) was constructed by Dr. Charles Spielberger. It consists of 20 State Anxiety items and 20 Trait Anxiety items. It has been popular all over the world as an instrument measuring Anxiety, and as a tool for research. The 20th century was called the Age of Anxiety and now it is the twenty-first century in which people might be involved more in the variety of complexities, positive and /or negative, as motives of human behavior. Among the causes of maladjusted behavior affect psychological health of the people anxiety/stress might exist. On one hand, the conceptualization and the emotional construct of anxiety is very

complex regardless its concept is not new.

In constructing the STAI, Spielberger admitted Cattelle's "two phases of anxiety," and elaborated to put this idea into the instrument: Therefore according to Spielberger, "the term anxiety is currently used to refer to at least two related, yet logically quite different constructs, that is, emotional state or condition (State-Anxiety) and personality trait (Trait-Anxiety)." State-Anxiety (State-A) is transitory and characterized by subjective feelings occur through the activation or arousal of automatic nervous system as specific situation; Trait-anxiety (Trait-A) can be conceptualized as relatively enduring differences among people in specifiable tendencies to perceive the world in a certain way and

in dispositions to react or behave in a specified manner with predictable regularity.

With the above said concept, Spielberger made STAI Form X(1970) and STAI Form Y(1983) which are both self-report inventory. In constructing the STAI Form-Y, he has emphasized the following 3 points: a) In order to develop “purer” measure of anxiety that would provide a firmer basis for discriminating between feelings of anxiety and depression, and for the differential diagnoses of patients suffering from anxiety disorder and depressive reaction more closely related to depression than anxiety were to be replaced. b) Those items including being “anxious,” being “eager,” as well as some “idiomatic items” for which the psychometric properties were relatively weak for certain group of people were replaced. c) In order to improve psychometric properties, the ratio of the items representing anxiety-present (A-p) to anxiety-absent (A-a) was reconsidered.

These points suggested that the researchers should alert to, for instance, content validity of items (psycholinguistic language of items, feeling connotation of items, especially of the idiom rather than the literal meaning of individual words), internal consistency of items be valid because of the different connotations of State and Trait (Spielberger, C.D., and Sharma S., 1976: van der Ploeg, 1989). At the same time, people have to be cautious of treating the intra-inter psychic state (including emotional arousal) of the individual which might be common to individuals from different cultures. On these points, the adaptation procedure of the scale and a cross-cultural study could not be separated in terms of research methodology.

With the above concept, this author, with the co-authorship of Drs. Spielberger, C. and

Hidano, T. and others developed a Japanese adaptation of the STAI Form-Y (STAI-JYZ) which will be applicable to the Japanese people.

Purpose

The goal of this study is to discuss an issue of the adaptation of the STAI Form-Y (STAI-JYZ) to the Japanese culture and the ‘cultural issue/awareness’ goes along with the review of the construction procedure.

In developing the Japanese version, as is suggested by Spielberger and Sharma(1976), researchers kept in mind that the validity and reliability of the scale was to be as high as it was in the original version. Along with this line, they should examine that each item in the Inventory should be valid and meaningful to the Japanese people/culture in terms, especially, of the connotation. The followings are the procedures we followed.

Method/Procedure

1 Translation of the STAI Form-Y. A careful but tentative translation of the items in the original STAI Form-Y was made by this author. At this point, rather than making a direct translation, the translation was made so that it was in line with the theoretical concept for each, State-A and Trait-A subscale. Also, the translation was made being conscious of the respective scales expressed the ‘purer’ emotions / feeling intended by the original author. The translated items were examined two times by four members in the Japanese research group.

2 Then the following trials/procedure were undertaken in relation to selection of the items:

- 1) Alternative translations for particular items in order for easier conceptualization as stimuli for feeling, as related to the content validity were added..
- 2) New items (11 for State-A and 14 for Trait-A) which are recognized among the Japanese people as the perceived / expressive feelings of anxiety and arousal of anxiety were added. These are items dealing with physical/biological concepts.
- 3) The word "now" was added to each item on the State scale in order to give the Japanese people a clearer stimuli for the conceptualization of transitory emotion, thinking of the style of apperception / apprehension of the Japanese. (However, this trial was considered as possibly inappropriate in terms of the intention of the author who admits a transitory state at the hypothetical and /or imaginative situation/condition, as the stimuli for State-A and was omitted later..
- 4) Thus, the tentatively made scales consists of 34 State-A items (17 anxiety present items;17 anxiety absent items) and 36 Trait-A items (19 anxiety present items; 16 anxiety absent items) respectively.

3 Selection of the items. Tentatively constructed instrument was administered to a total of 227 college students and the data was analyzed by varimax rotation (principal factor solution).

Among those, State-A items (alternatively selected and / or added) on the basis of hypothesis in view of cultural connotation, showed high value (over.4) were;"I am happy," "I am in control (Anxiety-absent item :A-a), "I am concerned with being alienated,"

"I am not calm," "I am very much concerned with eye contact of the others," "My heart fluttered," "Many thoughts come to my mind and disturb my study/work" (Anxiety-present item :A-p). Likewise, those items showed high values items (alternatively selected and / or added items) for Trait-A subscale were: "Disturbing thoughts come across my mind and I cannot study/work," "I feel nervous and restless," "I am concerned with the eye contact of others," "I am afraid of being alienated," "I am at a loss," "my heart fluttered," "I am concerned that my face blushed easily." (A-p), "My physical condition is good," and "I do not loose myself." (A-a). This tendency is similar with those showed by the items in State-A. Items dealt with "physical condition" and "being conscious of others" were high as was expected. (But those were eliminated, for we felt we needed more investigation in order to select, while the values on the items from original instrument were also high enough. So we rather used those items.)

At first those items which had loading values of under .4 were the objects for elimination in each subscales. With the said criteria, those tentatively added items as alternatives with one exception, did not remain for State-A subscale: (One exception was the item "I am in control" considered as the alternative to "I feel steady," and showed high value, but the value of original item was slightly higher than it.) "I am at a loss" and the original item of "I feel confused" showed the same value. And the alternative item "I am happy" showed little higher than the original item, "I feel pleasant," but the original one was selected, for, the difference does not seem to be affective. Then these loading values were examined so that the

numbers of items in each State-A and Trait-A is to be 20.

For State-A subscale, The A-p items of "I am concerned with being alienated," "I am very much concerned with eye contact of the others," "My heart fluttered," and "my thought come to my mind and disturb my study/work" showed high values also. But the items from the original instrument showed higher value. The only one A-a item of "I am in good physical condition" showed high value, and still was not selected. One of the reasons was that being against the hypothesis that the Japanese would use physical terms in expressing anxieties, selected did not show high value. So further investigation /consideration might be needed in order include this kind of category/phase in this instrument.

For Trait-A subscale, "disturbing thoughts come across my mind and I cannot study /work" was selected. Another alternative item of "I am joyful" was selected, though it showed slightly lower value than that of the original item, "I am happy."

Those items, "I am concerned with the eye contact of others," "I am afraid of being alienated," (A-p) and "My physical condition is good," (A-a) were not selected. Although those items cleared the criteria of .4, they did not show high enough to competitive to the value showed by the original items in the original instrument. So those were not selected.

4 Administration of tentatively constructed STAI-JY(T). Tentatively constructed STAI-YJZ(T), consisting of 20 State-A items (10 anxiety present items; 10 anxiety absent items) and 23 Trait-A (12 anxiety present items; 11 anxiety absent items) which was close to the original instrument was tested by 846 (male 397:female 449) Japanese college

students. Their ages ranged from 18-23. Checking with the means and SD, it can be said both gender groups showed a similar tendency. However, female students seem to have seen anxiety-absent items as likely to occur more often. The data obtained were also analyzed by factor analysis by varimax rotation, (orthogonal solution), by gender group,

Both groups showed relatively clear distinction between State-A and Trait-A except for several items, and this tendency was clearer with the female group. All of the State-A items found in factor 1 (Trait-A factor) are found to be anxiety present items. Also, it was found that with both groups, the item "I lack self-confidence" was loaded highest among anxiety present items and "I feel self-confidence" was found to be low among anxiety absent items.

Two Factor analysis (oblique solution, oblimin pattern matrix) was made by subscales (State-A and Trait-A), however, anxiety present items and anxiety absent items were clearly identified in each subscales. Both gender groups showed the same tendency. This proves the previous study by Iwata & Saito(1996) to be valid.

5 Construction, administration of STAI-JYZ (Japanese version of STAI Form-Y), and tests for validity and reliability of the Inventory. Since during this procedure, the authors realized that the equal number of 10 anxiety present items and anxiety absent items should be included in the subscales of State-A and Trait-A, respectively: Iwata, & Saito. (1996), from a comparative study using American students and Japanese students, found that the style of responding to anxiety (present/absent) on the part of the Japanese students is different from that of the American

students and that the Japanese students tend not to respond to the anxiety-present items expressively. This became an important finding which was taken into consideration in the construction of the current instrument.

Checking with the value of loading and the number of A-p items and A-a items, three items were eliminated from the Trait-A subscale and one was replaced for State-A subscale. Thus the STAI-JYZ consists of 20 items (each includes 10 A-p items and 10 A-a items) was completed. This is called STAI-JYZ, because of the cultural consideration for the construction of the instrument. The internal consistency of item reminder correlation was sought with both sex groups. Intercorrelation coefficients among sub-scales by sex were found to be high enough. Negative correlation coefficients between anxiety present and absent sub-scales are not very high in either the State-A or the Trait-A scale. This means that the sub-scales are not at opposite direction on the same dimension, but on different dimensions. This evidence supports our hypothesis that these sub-scales should be treated independently. This finding assured the reliability of the instrument from the view of internal consistency.

6 With STAI-JYZ, analyses (Means, SDs, validity and reliability) was made. With the data obtained from the college students (male 1088; female 1165). α coefficient of subscales is over .86 and it is close to that of .9 of the original instrument. Correlation between subscales in both State-A and Trait-A are .69 for male and .63 for female. They are also close to those of (.65 and .59) the original instrument. However, the correlation coefficient between A-p and A-a through both State-A and Trait-A subscales are higher than the correlation coefficient between A-p and A-a in

each subscales. This is consistent with the fact that A-p and A-a in each subscales was clearly distinguished. It was more clear than the correlation coefficient between State-A and Trait-A subscales..

Test-Retest reliability was examined by 30 college students with four months' interval, which was high. Construct validity was tested by 183 college students (male 69:female 114). during the lecture hour and just before the test (stressful situation). Concurrent validity was tested by 169 college students (male 50:female 169) with the Japanese version of Y-G Personality Inventory. These scales likely to measure emotional phase (D, C, I, N, O, Co) showed high correlation with subscales.

7 Administration of the STAI-JYZ to Occupational group (working adults). In 2003-2004, the authors administered the STAI-JYZ to total of 985 (Male 141 ; Female 844) working adults consists of mainly, sales clerk, and clerks. The age distribution of the group is in table 1.

Table 1
Breakdown analysis by age

age	M (N = 141)	F (N = 844)
18-20	0	3
21-25	11	92
26-30	46	281
31-40	62	399
41-50	8	52
51-60	13	13
61-65	1	1

Means and SDs by gender for State-A is in Table 2 and those of Trait-A is in Table 3

Table 2

Means and SDs for males (N=141)			Means and SDs for females (N=844)			Significance
State-A item	M	SD	State-A item	M	SD	
S_1a	2.38	.837	S_1a	2.37	.762	
S_2a	2.28	.868	S_2a	2.35	.794	
S_3p	1.81	.770	S_3p	1.77	.721	
S_4p	2.30	.914	S_4p	2.09	.827	* *
S_5a	2.17	.932	S_5a	2.21	.830	
S_6p	1.37	.627	S_6p	1.26	.593	
S_7p	1.76	.931	S_7p	1.50	.761	* * *
S_8a	2.16	.828	S_8a	2.27	.806	
S_9p	1.35	.709	S_9p	1.20	.500	* *
S_10a	2.27	.797	S_10a	2.35	.741	
S_11a	2.30	.874	S_11a	1.98	.704	* *
S_12p	1.80	.949	S_12p	1.61	.780	* *
S_13p	1.76	.881	S_13p	1.55	.726	
S_14p	1.67	.774	S_14p	1.50	.700	*
S_15a	2.12	.799	S_15a	2.18	.809	
S_16a	1.90	.828	S_16a	2.10	.812	*
S_17p	2.45	.949	S_17p	2.30	.880	
S_18p	1.63	.800	S_18p	1.52	.720	
S_19a	2.24	.856	S_19a	2.29	.798	
S_20a	2.23	.819	S_20a	2.25	.789	

*p<.10 **p<.05 ***p<.01

Table 3

Means and SDs for males (N=141)			Means and SDs for females (N=844)			Significance
Trait-A item	M	SD	Trait-A item	M	SD	
T_21a	2.71	.675	T_21a	2.83	.674	
T_22p	1.86	.738	T_22p	1.84	.723	
T_23a	2.19	.867	T_23a	2.26	.809	
T_24p	1.88	.803	T_24p	2.03	.789	*
T_25a	2.37	.827	T_25a	2.61	.776	* *
T_26a	2.63	.835	T_26a	2.70	.764	
T_27p	1.73	.806	T_27p	1.63	.703	
T_28p	1.91	.872	T_28p	2.12	.833	* *
T_29a	2.53	.774	T_29a	2.75	.806	* *
T_30p	1.69	.760	T_30p	1.74	.755	
T_31p	2.02	.821	T_31p	2.17	.791	* *
T_32a	2.40	.822	T_32a	2.62	.817	* *
T_33a	2.68	.762	T_33a	2.70	.876	
T_34p	2.56	.762	T_34p	2.57	.776	
T_35a	2.37	.836	T_35a	2.55	.800	* *
T_36p	1.91	.850	T_36p	1.91	.823	
T_37p	1.96	.896	T_37p	2.02	.849	
T_38a	2.55	.853	T_38a	2.56	.851	
T_39p	1.96	.863	T_39p	2.09	.813	
T_40a	2.58	.691	T_40a	2.80	.697	* *

*p<.10 **p<.05 ***p<.01

Two factor analysis by sex was made with in Table 4 and Table 5.
the same occupational group. The results is

Table 4
2 factor analysis by varimax rotation, orthogonal

State-A item	Factor		State-A items	Factor	
	1 (A-a)	2 (A-P)		1 (A-a)	2 (A-P)
S_1a	.645	-.290	S_1a	.737	-.286
S_2a	.673	-.385	S_2a	.700	-.365
S_5a	.703	-.181	S_5a	.630	-.203
S_8a	.702	-.202	S_8a	.668	-.213
S_10a	.755	-.266	S_10a	.785	-.181
S_11a	.397	-.141	S_11a	.489	-.136
S_15a	.767	-.184	S_15a	.719	-.121
S_16a	.703	-.147	S_16a	.790	-.224
S_19a	.889	-.189	S_19a	.785	-.274
S_20a	.727	-.180	S_20a	.745	-.490
S_3p	-.253	.441	S_3p	-.158	.435
S_4p	-.256	.596	S_4p	-.359	.513
S_6p	-.109	.742	S_6p	-.126	.591
S_7p	-.187	.710	S_7p	-.117	.666
S_9p	-.118	.760	S_9p	-.539	.630
S_12p	-.206	.754	S_12p	-.179	.698
S_13p	-.324	.764	S_13p	-.247	.620
S_14p	-.153	.523	S_14p	-.134	.631
S_17p	-.305	.620	S_17p	-.255	.484
S_18p	-.147	.566	S_18p	-.192	.608

Male:N=141

Female:N=844

A-a=Anxiety absent; A-P=Anxiety present

Table 5
2 factor analysis by varimax rotation, orthogonal

Trait-A item	Factor		Trait-A items	Factor	
	1 (A-a)	2 (A-P)		1 (A-a)	2 (A-P)
T_21a	.703	-.249	T_21a	.644	-.134
T_23a	.572	-.323	T_23a	.639	-.248
T_25a	.669	-.251	T_25a	.657	-.276
T_26a	.555	-.327	T_26a	.535	-.318
T_29a	.790	-.567	T_29a	.798	-.122
T_32a	.784	-.291	T_32a	.769	-.269
T_33a	.331	-.309	T_33a	.308	-.274
T_35a	.833	-.224	T_35a	.821	-.212
T_38a	.508	-.302	T_38a	.438	-.266
T_40a	.826	-.182	T_40a	.763	-.105
T_22p	-.281	.698	T_22p	-.217	.544
T_24p	-.184	.669	T_24p	-.243	.512
T_27p	-.261	.661	T_27p	-.255	.572
T_28p	-.190	.778	T_28p	-.148	.663
T_30p	-.104	.719	T_30p	-.112	.543
T_31p	-.314	.653	T_31p	-.293	.549
T_34p	-.109	.575	T_34p	-.248	.532
T_36p	-.204	.667	T_36p	-.176	.703
T_37p	-.161	.722	T_37p	-.143	.692
T_39p	-.182	.738	T_39p	-.109	.701

Male:N=141

Female:N=844

As was expected, A-a and A-p in each subscale (State-A and Trait-A) was clearly distinguished, This tendency was seen in the

analysis with college student groups, too. This means that this is a Japanese characteristics.

Table 6
Means and SDs by age (Working Adults, Female)

Age 41-50 (N=52)			Age 31-40 (N=399)			Significance
State-A item	M	SD	State-A item	M	SD	
S_1a	2.52	.779	S_1a	2.37	.775	
S_2a	2.56	.777	S_2a	2.37	.775	
S_3p	1.69	.701	S_3p	1.80	.732	
S_4p	1.92	.621	S_4p	2.11	.836	
S_5a	2.46	.851	S_5a	2.20	.811	
S_6p	1.19	.398	S_6p	1.22	.524	
S_7p	1.25	.440	S_7p	1.47	.718	
S_8a	2.37	.768	S_8a	2.28	.815	
S_9p	1.17	.513	S_9p	1.17	.466	
S_10a	2.37	.768	S_10a	2.37	.748	
S_11a	2.18	.713	S_11a	1.98	.659	*
S_12p	1.38	.530	S_12p	1.57	.743	*
S_13p	1.27	.448	S_13p	1.53	.694	**
S_14p	1.25	.437	S_14p	1.49	.664	**
S_15a	2.42	.776	S_15a	2.20	.812	
S_16a	2.35	.764	S_16a	2.09	.805	*
S_17p	2.08	.621	S_17p	2.31	.867	*
S_18p	1.40	.603	S_18p	1.55	.724	
S_19a	2.50	.780	S_19a	2.29	.770	
S_20a	2.35	.789	S_20a	2.27	.789	

*p<.10 ** p<.05

Ages 41-50 (N=52)			Ages 31-40 (N=399)			Significance
Trait-A item	M	SD	Trait-A item	M	SD	
T_21a	3.04	.593	T_21a	2.80	.690	
T_22p	1.67	.585	T_22p	1.87	.715	
T_23a	2.56	.752	T_23a	2.23	.791	*
T_24p	1.92	.710	T_24p	2.05	.810	
T_25a	2.85	.668	T_25a	2.59	.768	
T_26a	2.79	.723	T_26a	2.71	.734	
T_27p	1.54	.699	T_27p	1.67	.721	
T_28p	1.81	.627	T_28p	2.09	.833	*
T_29a	2.88	.676	T_29a	2.68	.821	
T_30p	1.58	.605	T_30p	1.75	.739	
T_31p	1.86	.633	T_31p	2.22	.820	**
T_32a	2.88	.676	T_32a	2.59	.818	**
T_33a	2.88	.943	T_33a	2.71	.877	
T_34p	2.35	.623	T_34p	2.56	.805	
T_35a	2.71	.776	T_35a	2.50	.798	*
T_36p	1.67	.712	T_36p	1.92	.807	
T_37p	1.73	.564	T_37p	2.01	.815	
T_38a	2.75	.860	T_38a	2.57	.811	
T_39p	1.75	.556	T_39p	2.05	.788	
T_40a	2.98	.610	T_40a	2.76	.701	

*p<.10 ** p<.05

From the result, with this occupational group, it can be that males are more stressed than females, but still show 'self-confidence' there. Females seem to be more reluctant in terms of personality choosing the anxiety-absent items, such as "I am happy," "I am content with" in the Trait-A subscale. However, their trait shows that they 'lack self-confidence.' This tendency is consistent with the study on college students. This might reflect a traditional expectation of the Japanese culture on each gender's role.

When comparing the result with the college students, people in occupational groups are more 'self-confident' in each gender group. Also, compared this characteristic with different age groups within this occupational group, some differences are found: For instance, ages of 41-50, compared with ages of 31-40, (female), shows higher 'self-confidence' as the characteristic of this age group. On one hand, the latter age group shows some 'anxiety' in choosing more A-p items. This result might show that the characteristic of people might not be interpreted by only one factor influencing the emotion/behavior of the individuals.

Provided that the individuals are in 'self-in-relation,' their behavior might be influenced by various factors, which interact with each other. Other than those factors considered in the previous study, experience of the individual and change of age might also play important roles.

Further investigation, from this viewpoint, is also needed.

Result and Discussion: From Cross-cultural View

In the process of the development of the

Japanese adaptation of the STAI-Y, several statistical analyses were carried out, and as a result, most of the original STAI-Y items remained in the STAI-JYZ, which is the final adaptation (version). It maintains its validity and we can say that the STAI-Y is well structured in terms of keeping up with the theoretical concept of anxiety. The cross-cultural issues are interrelated to the issue of the validity of the instrument.

1 Re: Selection of items. In making a tentative version, we selected items mentioning 'physical condition' and, also, items regarding 'relationships' as possible items for the Japanese in expressing anxiety. The items "I am in good physical condition" (State-A, A-a) and "My physical condition is good" (Trait-A, A-a) satisfied the criteria (over.4) for selection. This time, however, those were omitted thinking we might need more investigation towards the hypothesis (above mentioned), while the items from the original instrument were loaded high. Other items did not load high as was expected.

Items, "I am very much concerned with the eye contact of the others," "I am concerned with being alienated," (State-A, A-p, Trait-A, A-p), "I do not care about being blamed by others for their failure" (State-A, A-a) were high but the original item remained the same.

And "I wish I could be as happy as others" (Trait-A, A-p) was also high and included in the list for further analysis but was eliminated later because we had to keep equal number of A-a and A-p items in subscales of State-A and Trait-A because of the characteristics of the Japanese who tend to choose A-p items. Other items tentatively added were not met the criterion of over.4.

The fact that the item "I am in good physical condition" (A-a) loaded relatively

high, might show the Japanese characteristics of 'care about the others.' In selecting the items, the authors hypothesized that there might be any difference between people in the U.S.A. and the Japanese regarding the way they see themselves in 'I-thou' relationships. From the author's previous study, it was found that the Japanese tended to see themselves in-relation-to others, being dependent on the others, not seeking for 'interdependent relationships.' Thus, they might be more conscious of others, (they are conscious about how they are seen by others, how others think of them, what others feel about them, what others do, what others expect of them, etc.). They seem to direct value to other inner selves. Accordingly we first added the above mentioned items for State-A.

Also, as was expected the item, "I am concerned with the eye contact of others" was loaded high. This might explain the idea that the Japanese are conscious of others (how they are seen as to what they are doing). Together with this, high value on "I am afraid of being alienated" seem to tell us that they are conscious of others and they do not want to do something different from the others do. The high value on "I wish I could be as happy as others seem to be," is also likely to be related to this characteristic. It may be summarized, they want to keep harmony with the others. The item "I do not care if I do things different from the others" was not loaded high in this experiment though. Certainly it shows the characteristics of the Japanese which have been indicated by the literature. Some contradictory phases are seen here: Japanese, at times, show mild 'assertiveness,' but otherwise they suppress emotion especially those of positive ones aroused on their part.

Looking at these tendencies together with some of the other items loaded lower, such as, "I do not care about being blamed by the others for their failure," "I do not care if people speak ill of me," it might be said that the tendencies are likely to be related to another characteristics of the Japanese such as "shameful feelings." The Japanese are more conscious of others for what they themselves are doing, and for what the others think of them. On one hand, if they feel they fail in what they do, they feel ashamed, and they blame themselves; while they do not blame others' (someone's) failure in close relationships.

The Japanese are self-directed and/or inner directed in nature, and this might not support healthy 'I-thou' relations: it leads them to the feeling of guilt or self-blame (Combs, et al., 1971; Rogers, 1958, 1961). The conceptualization of, and, being in 'I-thou' relation seem to be different from those of the American (Western) people.

The item of 'self-confidence' was expected to be low among the Japanese students in terms of the loading value: In the literature the 'tendency of the Japanese having low self-confidence' has been pointed out (Fukuhara, M., 1981; Sue. D. et al., 1972, 1973). The study this time also reflected this tendency by showing lower loading on "I am self-confident" and high loading on "I lack self-confidence," (Japanese working adults, however, looked high on this item. This is significant among the males which will be discussed later.) However, the above said tendency is especially true when males express their 'positiveness.' This might be related to the Japanese' hesitation to be assertive. The Japanese students showed more intensity on anxiety present items than on anxiety absent items. This also supports

Iwata's study which suggests "The Japanese are likely to suppress expression on positive feelings, therefore the Japanese are likely to choose less positive responses." (Iwata & Saito, 1996) The correlation between negative and positive subscales was high for the American students while this was not true with the Japanese students. These results should be taken into full consideration in carrying the adaptation /construction of the instrument. This might affect the validity.

With the above mentioned concept, though with high loadings, some items which were eliminated need to be investigated further from a cross-cultural view: different phases /dimensions of anxiety which were not intended to be measured by the original instrument might exist. They might be measuring different phases/dimensions of anxiety from which were intended to be measured by the original instrument.

2 Re: Analysis/Interpretation. Items of the State-A scale and the Trait-A scale which loaded on only one factor were considered to be significant, and it was determined that the style of loading influences the construct validity. On this point we should be cautious about examining the validity of the instrument, for the distinction of State-A and Trait-A were not necessarily clear. However, a distinction between anxiety absent items and anxiety present items was found to be clear in both scales, State-A and Trait-A, with both gender groups. The distinction was clearer than the distinction found between the scales of State-A and Trait-A. These tendencies are also seen in the study with the occupational groups. It is understandable that State-A and Trait-A are sometimes difficult to differentiate, however.

3 Re: Measuring the Emotion. The authors

had to face the difficulties of finding appropriate words in Japanese to express the same (equivalent) feeling (not the content) expressed in English. This was especially true with the items for the State-A scale.

There might be processes in which people perceive, feel, experience, etc., and the basic process for these, in human beings, might exist. This might explain a circular of emotion in terms of levels: arousal of emotion, experienced emotion, expressed emotion and the emotion measured by instruments. This circular pattern might be consistent with and each level of emotion affects the others. This might be true with the occupational group. However, at the same time, the translator did conceptualize that there might be a specific personality related proneness (regarding anxiety), to a certain degree, at the choice of Trait items.

The Japanese tended to use verbal expressions related to a 'physical condition' in mentioning 'anxiety,' 'fear,' 'tense,' etc. in a stressful situation. In responding to items expressed by words, they might be thinking of those 'physical reactions' as occurring at 'post stressful situations.' This issue might have to be examined further in carrying out a study dealing with emotion, especially from the viewpoint of similarities and differences of individuals having different cultural backgrounds.

4 Re: A cross-cultural study: Similarities and differences. The authors have realized that the term 'cross culture' refers to not only so called culture in a broad sense but individual differences as well: As to the verbal expression (response to the inventory) of emotions/feelings, it is true that individual differences will be found regardless of whether s/he is within the culture or in a

different culture: It will be influenced by (a) how the person feels/imagines, (b) how it is expressed in a different language and/or in different expressive ways (Ekman, 1971), and (c) how they react to the situation as it is observed. Lazarus indicates that there are approximately 120 kinds of emotions (Lazarus, 1990). Carkhuff presents over 130 emotions a counselor would deal with at a counseling session (Carkhuff, 1990). These emotional terms have been translated into Japanese. The Japanese counselors, for instance, have to be aware of them in order to be well trained. At the same time, literature and studies which dealt with 'emotions' in the past show that there is a common phase of emotion which we should deal with. 'Anxiety' seems to have a nature of complexity, but with the above mentioned reasons, it is so challenging to study.

The author should say that after the studies from every possible angle, the STAI-YJZ has been constructed. It was found that the items selected for it are almost the same as items used in the STAI Form-Y (original version). This means that the STAI Form-Y, as well as STAI-JYZ has been well constructed from view points of validity and reliability. Also the fact that on the alternatively selected items the Japanese showed similar value with on the original items might mean people in different cultures feel similar kind of feeling at certain situations. This is especially true with the State-A items. Further experiments, however, will have to be carried out with heterogeneous groups of people, such as patients, people in various occupation, etc., in order to examine construct and concurrent validities. More analyses will have to be made from an 'item intensity specificity' view in order to examine content validity, etc. Especially regarding

those items for which we first hypothesized as the feature of the Japanese and were not chosen are to be examined. Along with this kind of study, the 'nature of anxiety' would be clarified. This study has encouraged the researchers to investigate important and basic issues further, such as the 'nature of anxiety,' 'commonalities and differences among individuals in different cultures,' 'methodology of cross-cultural study,' etc.

Conclusion

After the preliminary stage in which translated items were tested, STAI-JY was constructed tentatively and administered to 846 Japanese students. As a result, STAI-JYZ, consisting of 20 of the best State and Trait anxiety items with equal numbers of both anxiety-present and anxiety-absent items, was constructed. Items in the STAI-JYZ are found to be equivalent to items in the STAI Form-Y (original version), except for 3 items, which were replaced in the Trait-A subscale. Factor analyses, item analyses and measures of internal consistency (alpha coefficients, item-remainder correlations) proved the high validity of this instrument.

Later the Japanese working adults group consisting of 985 (males 141 and females 844) were administered the STAI-JYZ. And the clear distinction from A-a and A-p and the other characteristics of the Japanese were found in this experiment.

The fact that the Japanese might suppress positive feelings (anxiety absent) was found was proven by a previous study (Iwata & Saito 1996). Therefore, the inclusion of an equal number of anxiety-present items and anxiety-absent items in both subscales (State-A and Trait-A) was appropriate for the construction

of the Japanese version.

The Japanese are said to be an emotional people but they tend to suppress it. Emotions do not appear to surface easily: These are internalized as a general (Sugiyama, 1976). Especially this is true with positive emotions. They tend not to express their positives and/or positive feelings to others. For instance, if they are asked about their 'physical condition' by others many of them answer "all right" or "good" even if they are not feeling well enough to say so. This might be from a so-called 'guilt' culture, in which one hesitates to make others feel bad. The above positive response, "I am in good physical condition" might be interpreted as follows; one might feel that if s/he responded to the inquiry negatively, saying for example, ".....well, I am not feeling well," the party (the other person) who is kind enough to inquire about her/his physical condition will be unhappy. It is not good for their 'harmony' and it may make one feel guilty for making the other party feel bad.

This could be considered in connection with another characteristic of the Japanese 'shame' culture. When a person encounters something bad in a group to which they belong, they tend to feel guilty and ashamed, regardless whether it happened for their sake or not.

According to Sugiyama, the Japanese's expressive way of emotion is (under the soft feeling) something compulsive, and rational, and emotion creates paradoxical outcome in terms of recognition of the emotion" (Sugiyama, T., 1976).

In addition, the Japanese are likely to want to be 'harmonious' with groups that exclude people who are different from them: They are to be with the group (family, workplace, community, etc.), being loyal to the group,

therefore, they have to be dependent on each other. 'Dependency' (Anatomy of dependence) is different from 'interdependent relationships' in which the individuals develop themselves in their unique way, in self-in-relation while in the Japanese way of 'dependency,' one has to follow the others (in order to be harmonious with the others in the group they belong to).

One seeks being dependent on others and, at the same time s/he suppresses 'negatives' in order to be in harmony with the others. They are, to some extent, assertive in a mild way. Also, they tend to suppress the positives. This also might have appeared on the choice of the items of A-p on STAI-JYZ: The Japanese tend to hesitate to express positives.

Summary

From the viewpoint of similarities and differences (cultural identity) among the individuals belonging to the different culture.

1 Translation. We have to keep in mind that translation should pay attention to the 'connotation,' which inform will leads to obtain acceptable content validity and/or concurrent validity. This is the basic/key concept for constructing the adaptation of the specific instrument.

2 Dealing with emotion. As to the emotional expression, there might be similarities and differences among the different individuals having different backgrounds. Similarities can be discussed from the viewpoint of 'mechanisms' (regulatory system of emotional arousal) of emotions in human beings. The differences will be discussed from the viewpoint of their expression of emotion. Factors that influence emotional expression are as follows: conscious

awareness of the emotion, process of emotional arousal, perception/cognition of emotion, ways of expression of an emotion, etc., on the part of the individuals. Those are physiological-social-cultural factors, and customs they follow, culture, tradition, religion, spirituality, etc. are also included there. Should we accept those hypotheses, as the characteristics of the Japanese this author has pointed out here might change according to the change of the generations. For instance, they might become more assertive as their personalities become Westernized.

3 Reflection from the experiment. We have thought that something 'physical' relate, at least, to the choice of anxiety in items. In fact, we have obtained high loadings on some of the items added from this viewpoint. At the same time, loadings on the original items (original STAI-Y) also showed the same figure. These findings have given us the assignment to explore the 'nature of anxiety and culture' further.

4 A thought on culture from the viewpoint of adaptation of the STAI-Y. According to Minami(1994), the Japanese are reflectively loyal to authorities without thinking. This might be embedded in Zen-Jukyo principle. This covers a kind of masked egoism as if they were adjusting to environmental factors, especially to human relationships. This kind of 'self-centeredness' is a strategy for harmony in the relationships.

On the other hand, Doi, (1971, 1986) from the viewpoint of social relativism, contradictorily, explains how the Japanese feel when they face a 'happy situation.': Doi, as covert consciousness on the part of the Japanese, pointed out the dualism of the consciousness: According to this, for instance, the feeling of 'happiness' is 'transient one' to them, and

this kind of sentimental feeling is connected to 'unhappiness,' for which they blame themselves (guilt feeling). Therefore, 'happiness should not be celebrated overtly: it should be enjoyed moderately and carefully. Unless otherwise, they will ashamed of it.

Those mentioned above are consistent with the Johnson's (1993) statement that the Japanese are emotional people but these emotions do not appear in mutual exclusive relationships. They are hesitant to express emotions expressively/overtly. There is one cushion between consciousness and expression regarding Japanese emotions. We might imagine a Noh drama, a traditional Japanese play, in which the player and audience are in tune with (*iki* in Japanese) situational variations. We might have to become aware of the fact that there are messages behind the messages in their expressions.

Identity on the part of the Japanese is created by a sense of belonging: Physical collectivism and togetherness bring about heart-to-heart talks, naturally 'silence' is a sign of honesty and trust of others.

Intuitive communication exists, therefore, at the time of vocal communication, people are more sensitive to 'what is implied' than to 'what is expressed.' This might reflect the way of the expression on the part of the Japanese which expresses anxiety through physical expression. Also, with non-verbal expression, for instance, eye contact, something intuitive relates to so called sympathetic (*omoiyari*) culture.

This topic will lead to the discussion of 'empathy' in 'omoiyari culture.' Empathy is defined as an emotion to feel what the other person feels, as if the one is the other person. With the western concept, it is the empathy in which one helps the others so that they could

make their own decision; contrary to this, the Japanese empathy seems to be an ‘open-ended’ conversation, in which one listens and absorbs it before the speaker continues to express his will or opinion. The Japanese style of empathy is arranged, thinking what the speaker expects of them. This might not fit to the concept of ‘empathy’ cited in the literatures (for instance, Rogers’).

This discussion also leads to the discussion of ‘Dependency.’ Empathy of the above said sort and dependency stimulate and sustain each other. From this view point, the Japanese choice of Anxiety-present items might be due to their seeking ‘dependency’ (physical dependency). This produces a consciousness of social linkage on the part of the individual, in which they are to be loyal and in harmony with. Those (shame, guilt, dependent) phases of the Japanese people also might be related to the vertical alliance, in a status conscious culture in the social system.

Individuality in the ‘self-in-relation’ (Ivey & Ivey, 2003) on the part of the Japanese is difficult to establish. Social involvement and individuality are in opposition to each other. There, they are confronted. Culture and the individual are linked by the social system in this way.

In this study, the difference between A-p and A-a is significant compared with the difference between State-A and Trait-A, even when compared with the results of the American people. Also, the difference between A-p and A-a is significant compared with the difference between male and female. We need further exploration on this from the viewpoint of ‘cultural implication.’

References

- Benedict, R.(1946). *The chrysanthemum and the sword*. Boston: Houghton Mifflin.
- Carkhuff, R.(1987). *The Art of Helping*. Amherst, Mass: Human Resource Development Press. Inc.
- Combs, A.W., Avila, D.L, & Purkey, W.W.(1971) *Helping relationships: Basic concepts for the helping professions*. Boston: Allyn & Bacon.
- Doi, T. (1971). *Amae no Kozo* (The Anatomy of Dependence). Tokyo: Kobundo (In Japanese).
- Doi, T. (1985). *Omote to Ura*. Tokyo: Kobundo (In Japanese).
- Doi, T. (1986). *The anatomy of self: The Individual versus Society*. Tokyo: Kodansha.
- Eguchi, S. & Itsukida, S. (1998). *Amae to Izon*. Tokyo: Kobundo [Translation: Johnson, F. (1993) *Dependency and Japanese Socialization*]
- Ekman, P.(1971). Universals and cultural differences in facial expressions of emotion: In J.K.Colc (Ed.). *Nebraska Symposium on motivation*, 1971 (pp.207-283). Lincoln: University of Nebraska Press.
- Fukuhara, M.(1981). Some thoughts on Self-Actualization in Adolescents. In L.L.Adler (Ed.) *Cross-Cultural Research in Human Development* (pp.74-77). New York: Praeger
- Fukuhara, M.(1986). The Attitude of students towards consultation/counseling. *School psychology International*. **7**, 76-82.
- Fukuhara, M. (1986). *Factors affecting students counseling services-from the viewpoint of counseling psychology*. Tokyo: Kazama Shobo. (In Japanese)
- Fukuhara, M. (1988). Self-Actualization: Its Implication for Individual and Culture. Unpublished discussion summary of papers presented at a symposium at the XXIV International Congress of Psychology, Sydney, Australia.
- Fukuhara, M. (2000). Inclusion of Counseling in Japanese Adolescent Development. Paper presented at the XXVII International Congress of Psychology, Sockholm, Sweden.
- Hidano, T., Fukuhara, M, Iwawaki, S., Soga, S. Spielberger, C. (2001). *STAI-JYZ manual* (in

- Japanese). Jitsumu Kyoiku Shuppan.
- Ivey, A.E., & Ivey, M.B. (2003). *Intentional Interviewing and Counseling*. (5th ed.) Pacific Grove, CA: Thomson Learning.
- Iwawaki, S., Eysenck, S.B.G., & Eysenck, H.J.(1975). Differences in personality between Japanese and English people. *J. of Social Psychology*, **102**, 27-33.
- Iwata, N., & Saito, R.(1996). Japan-U.S. Comparison of responses to the STAI items among University students: a preliminary report, Unpublished paper.
- Iwata, N., Mishima, N., Shimizu, T., Mizoue, F., Fukuhara, M., Hidano, T., & Spielberger, C. D. (1998). Positive and Negative Affect in the Factor structure of the State-Trait Anxiety Inventory for Japanese Workers. *Psychological Reports*, **82**, 651-656.
- Lazarus, R.S.(1991). *Emotion & Adaptation*. New York: Oxford University Press, Inc.
- Lonner, W. (1990). An overview of cross-cultural testing and assessment. In R. Briling (Ed.). *Applied cross-cultural psychology* (pp. 56-76). Newbury Park, CA: Sage.
- Lynn, R., & Hampson, S.L.(1975). National differences in extroversion and neuroticism. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, **14**, 223-240.
- Minami, H. (1994). *Nihonjin Ron*. Tokyo: Iwanami shoten. (In Japanese)
- Rogers, C.R. (1958). The characteristics of a helping relationships. *Personnel and Guidance Journal*, **37**, 6-16.
- Rogers, C.R. (1961). *On becoming a person*. Boston: Houghton-Mifflin.
- Shimizu, H., & Imae, K. (1981). Development of the Japanese edition of the Spielberger State-Trait Anxiety Inventory(STAI) for the student use. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **29**, 62-67. (In Japanese)
- Spielberger, C.D., Gorsuc, T. Lushene, R. (1970). *STAI Manual for the State-Trait Anxiety Inventory*. Palo Alto, C.A: Consulting Psychologists Press.
- Spielberger, C.D., & Dia-Guerrero, R. (1976). *Cross-cultural anxiety* (Vol.1). Washington, D.C.: Hemisphere.
- Spielberger, C.D., & Sharma, S. (1976). Cross-cultural measurement of anxiety. In C.D. Spielberger & R. Diaz-Guerrero(Eds). *Cross-cultural anxiety* (Vol.1). Washington, D.C.: Hemisphere.
- Spielberger, C.D., Gonzalez, H.P., Taylor, C.I., Algaze, B., Anton, W.D. (1978). Examination stress and test anxiety. In C.D. Spielberger & L.G.Sarason (Eds.). *Stress and anxiety* (Vol.5). New York: Hemisphere/Wiley.
- Spielberger, C.D., Vagg. P.R., Barker. L., Donham, G.W., & Westberry, L.G.(1980). The factor structure of the State-Trait Anxiety Inventory. In I.G. Sarason & C.D. Spielberger (Eds.). *Stress and Anxiety*. (Vol.7). Washington, D.C.: Hemisphere.
- Spielberger, C.D.(1983). *Manual for the State-Trait Anxiety Inventory (STAI)*. Palo Alto, C.A.: Consulting Psychologists Press.
- Spielberger, C.D. & Doaz-Guerrero, R. (1983). *Cross-cultural anxiety* (Vol.2). Washington, D.C.: Hemisphere.
- Spielberger, C.D. & Diaz-Guerrero, R. (1986). *Cross-cultural anxiety* (Vol.3). Washington, D.C.: Hemisphere.
- Spielberger, C.D., & Vagg, P.R.(1987). The treatment of test anxiety. A transactional process model. In R. Schwarzer. H.M. van der Ploeg & C.D. Spielberger (Eds.). *Advances in Test Anxiety Research* (Vol.5). Lisse: Swets & Zeitlinger.
- Spielberger, C.D., & Sydeman, S.J. (1994). State-Trait Anxiety Inventory and State-Trait Anger Expression Inventory. In M.E. Maruish (Ed.) *The use of psychological tests for treatment planning and outcome assessment*. Hillsdale, N.J.: LEA. (pp.292-321).
- Spielberger, C.D., Ritterband, L.M.,Sydeman, S.J., Reheiser, E.C., & Unger, K.K. (1995). Assessment of Emotional States and Personality Traits: Measuring Psychological Vital Signs. In J.N. Butcher (Ed.). *Clinical Personality Assessment: Practical Approaches*. New York:

Oxford University Press.

Spielberger, C.D., Iwata, N., & Saito, R.H.(1996).

Comparison of the responses of Japanese and American university students to STAI items that assess the presence or absence of anxiety. *J. of Personality Assessment*. (running ahead)

Sue, D.W., & Kirk, B.A.(1972) Psychological characteristics of ChineseAmerican students. *Journal of Counseling Psychology*, **19**, 471-478.

Sue, D.W., & Frank, A.C. (1973). A typological approach to the psychological study of Chinese and Japanese American college males. *J. of Social Issues*, **29**, 129-147.

Sue, D.W., & Kirk, B.A. (1973). Differential characteristics of Japanese-American and Chinese-American college students. *Journal of Counseling Psychology*, **20**, 142-148.

Sue, D.W, Ivey, A.E. & Pedersen, P.B. (1996). *A theory of multicultural counseling & therapy*. Pacific grove, Ca.: Brooks/Cole Public company.

Sugiyama., T. (1976). *Japanese Patterns of Behavior*. Honolulu: University of Hawaii Press.

The Youth development headquarters (1981). *International Comparison of Japanese Children and their Mothers*-Findings of a Survey Conducted in Commemoration of the International Year of the Child. Tokyo: The Prime Minister's Office of Japan.

Unger, K.K.(1995). Assessment of Emotional States and Personality Traits: Measuring Psychological Vital Signs. In Butcher, J.N.(Ed.)

Clinical Personality Assessment: Practical Approaches. New York: Oxford University Press.
Vagg, P.R., Spielberger, C.D., & O'Hearn, T.P. (1980). Is the State-Trait Anxiety Inventory multidimensional? *Personality and Individual Differences*, **1**, 207-214.

Acknowledgement

Great appreciation goes to Dr. Charles D. Spielberger, distinguished professor University of South Florida. He, not only for offering us the opportunity of dealing with this study but also for giving us kind and considerate suggestions all through this work. His conscientious, enthusiastic and patient help has been greatly appreciated. Appreciation also goes to Dr. Hidano, my long-term mentor in Japan for his kind help. Many thanks to the members of this study group, Profs. Iwawaki, Soga and Ida who have been cooperative for the completion of the STAI-JYZ. Special thanks goes to Dr. Iwata, who joined us later with his stimulating ideas. Thanks to students who took the test as subjects. Also, thanks goes to Ms. Saita, career counselor, who collected the data from working adults.

—2007.9.15 受稿, 2007.10.10 受理—

Appendix

STAI-JYZ items

State-A

1. I feel calm
2. I feel secure
3. I am tense
4. I feel strained
5. I feel at ease
6. I feel upset
7. I am presently worrying over possible misfortunes
8. I feel satisfied
9. I feel frightened
10. I feel comfortable
11. I feel self-confident
12. I feel nervous
13. I am jittery
14. I feel indecisive
15. I am relaxed
16. I feel content
17. I am worried
18. I feel confused
19. I feel steady
20. I feel pleasant

Trait-A

21. I feel pleasant
22. I feel nervous and restless
23. I feel satisfied with myself
24. I wish I could be as happy as others seem to be
25. I feel like a failure
26. I feel rested
27. I am "calm, cool, and collected"
28. I feel that difficulties are piling up so that I cannot overcome them
29. I worry too much over something that really doesn't matter
30. I am happy
31. I have disturbing thoughts
32. I lack self-confidence
33. I feel secure
34. I make decisions easily
35. I feel inadequate
36. I am content
37. Some unimportant thought runs through my mind and bothers me
38. I take disappointments so keenly that I can't put them out of my mind
39. I am a steady person
40. I get in a state of tension or turmoil as I think over my recent concerns and interests

原著論文 Translating and Adapting Psychological Tests for Cross-Cultural Uses の解説

上記タイトルの論文について、マイクロカウンセリング研究との関連を考える上で編集委員会の依頼を受け解説を加えた。

マイクロカウンセリング(microcounseling)の創始者アイビー, A. は‘個人’のとらえ方として‘self-in-relation’(関係性の中の個人)の考え方を提唱した。この考え方によると、個人の存在には「縦」と「横」の発達が付きまとう。縦の発達とは、いわゆる発達心理学等という生物学的発達であり、そこには共存する背景すなわち、環境的、文化的要因がかかわっている。それが横の発達である (Ivey, A. et al. 2004)。

アイビーによると、カウンセリングや心理療法の目的は、トータルとしての個人の成長・変換・発達を援助することである。ここでは個人はユニークな存在としてその実現(自己実現)を果たすことができるのである。彼はその実現とともにあるものをウェルネスということば(コンセプト)で表現しようとしている。人々のそのプロセスを研究者や実践家が援助することにより、社会的貢献を果たすことができるのである。要するにカウンセリング・心理療法はそれぞれの個人や集団に対してその援助プロセスが創造・工夫されることにより、‘役立つ’のである。

筆者はマイクロカウンセリングに関してはいうまでもなく、それ以前より長年にわたり、カウンセリングと‘文化’について、諸種の角度から関心をもってきた。というのも、米国発祥のカウンセリングを1960年代初期に日本に導入するに際し、壁にぶつかったからである。そこでカウンセリングや心理療法が異なる文化的背景をもった人々に共通に効く部分と効かない部分があると考えた。効く部分には「カウンセリングにおける基本的姿勢」が有効にはたっているのであろう、効かない部分には文化の異なりから来る妨害要因がはたらくのであろうと仮定した。そしてとくに日本で有用なカウンセリング・心理療法を確立するためには、それぞれについて検証が必要であろうと考えた。

カウンセリング・心理療法の立場からこれを

行う方法はいくつかある。ひとつは克明な質的かつ量的な事例的研究をとおしてである。二つ目は実験, すなわち調査やアセスメント・心理測定を通してである。

今回の研究は後者に関連したものである。すなわち心理測定を用いて文化的背景を理解することである。そもそも心理測定の研究目的には、1) テストそのものを研究する(テスト構造, 妥当性, 信頼性, 尺度の意味など), またはその結果, 2) 特定の文化に適合するテストを作成する, 関連して, 3) テストの利用を考える, 4) 前記1), 2), 3) をふまえて‘文化’理解をこころみる, などがある。本論文は4)にあたる。

筆者らは先にカウンセリングに用いる心理検査のひとつEPPS(Edwards Personal Preference Schedule)の日本版作成を行った(肥田野, 岩原, 岩脇, 杉村, 福原, 1964, 1970)。これは当該尺度の日本人への適用を目的とするものであったが、ここでは、検査を構成する上で‘文化’に配慮した項目を選択することが肝要でありこれは個人の自己理解やカウンセリングへの利用に有用性を高めるものであった。

本論文ではSTAI(不安テスト)について日本人により有用な心理検査を作成する試みを紹介し、さらには‘文化’のコンセプトから、日本人のパーソナリティや‘精神構造’をながめてがかりを考察した。これは、カウンセリングや心理療法を行う上でも‘文化’を考える材料を提供するものであろうかと考える。

なお本論文は国際心理学会(於北京, 2004年)招聘シンポジウムに発表を予定したが、筆者の都合で大会参加を見送ったため、未発表論文となった。関係者の了承を得た上で今回本誌に投稿するにあたり、論文を見直し、加筆修正をした。その結果、経過(method/procedure) 1—6 (P16—P19) は要約のみにとどめた。ご了解おきいただきたい。

編集後記

お陰様で「マイクロカウンセリング研究 Vol.3 No.1」をお届けできる運びになりました。本号では特別寄稿論文として肥田野直先生にご執筆いただき、さらに査読の結果原著論文 2 編を掲載することができました。会員諸氏のご投稿をお待ちしています。

編集委員

編集顧問 肥田野 直
委員長 稲垣 貢
委 員 森山 賢一 鈴木 祐弘
玉瀬 耕治 (ABC 順)

マイクロカウンセリング研究 第3巻 第1号

The Japanese Journal of Microcounseling Vol.3, No.1

©2007年10月31日発行

編集責任 日本マイクロカウンセリング学会
会長 福原真知子

発 行 日本マイクロカウンセリング学会
会長 福原真知子

本 部 〒167-0034 東京都杉並区桃井1-18-7
事 務 局 〒163-1030 東京都新宿区西新宿3-7-1
新宿パークタワー 30階
TEL 03-5326-3415
FAX 03-5326-3605

印刷・製本 株式会社厚德社

無断複製・転載を禁じます。

The Japanese Journal of Microcounseling

Vol.3, No. 1/October 2007

Edited and published by

The Japanese Association of Microcounseling

30th F. Shinjuku Park Tower, 3-7-1, Nishi Shinjuku
Shinjuku-Ku, Tokyo 163-1030, Japan

President: Machiko Fukuhara (Tokiwa University)

Editorial Committee: Tadashi Hidano (Tokyo University)

Mitsugu Inagaki (Yokohama Volunteer Association)

Kenichi Moriyama (Tokiwa University)

Yasuhiro Suzuki (Matsudo Minami High School)

Koji Tamase (Tezukayama University)

Contents

The Preface Machiko Fukuhara (Tokiwa University)..... 1

Special Contribution Tadashi Hidano (Tokyo University)..... 3

Articles:

Mariko Yamamoto (Kurume University)

The Effect of a Future Oriented Self-Solution Developmental Counseling
Approach-A Comparison of the Future Oriented Approach with the Present
Oriented Approach..... 5

Machiko Fukuhara (Tokiwa University)

Translating and Adapting Psychological Tests for Cross-Cultural Uses

- Measuring Anxiety in the Japanese Culture..... 15

The Japanese Association of Microcounseling

日本マイクロカウンセリング学会